

平安時代の逆修の変遷

山口 希世美

はじめに

結縁経は逆修供養の際に行われると考えられてきた。それは、逆修が仏縁を結ぶことを願う行為と考えられていたからだろう。しかし平安時代で、逆修供養の際に結縁経は行われていない。その原因は、結縁者自身が仏縁を結ぶことを結縁の主目的としてなかっただけでなく、逆修の目的も仏縁を結ぶことではないと起想される。そのため、結縁経が始まる撰関期以前の逆修について確認する必要がある。

ところが、『逆修説法』や『逆修講縁起』等の文献資料、考古資料の板碑に関する中世逆修の研究はあるが、平安時代の逆修を詳細に扱った研究は見当たらない。川勝政太郎が平安時代から近世までを概説的に扱っているのみである。¹⁾

本稿では、平安時代の逆修供養と中陰供養の内容の変遷、及び、比較考察することにより、逆修が仏縁を願うことを主目的とした行為ではなかったことを論じ、結縁経が逆修供養で行われなかった原因を明らかにする。

一 古代の中陰供養

逆修とは、『日本国語大辞典』に「生きているうちに、あらかじめ死後の冥福を祈って仏事を行なうこと。死後に行なう七七日の仏事を生きているうちに営み、冥福を祈ること」とある。²⁾死後の冥福を祈る仏事とは、没後四十九日（七七日）までの七日ごとの中陰供養や、周忌供養などの菩提供養を指すのだろう。ということは、逆修は自らを被供養者として、中陰供養と同様の事が行われていると解される。確認する必要があるが、平安時代の中陰供養の研究が見当たらないので、天皇に対する中陰供養の始まりと、院政期の中陰供養だけでも確認しておきたい。それら中間は調査中である。

中陰供養が最初に見られるのは、持統上皇に対してである。大宝三年（七〇三）正月五日の二七日に四寺、七七日に卅三寺で齋を設けさせている。以後、奈良時代前後の中陰供養は齋と記され、諸寺で誦経をさせることである。聖武天皇以後では一周忌も確認できる。しかし、何の仏を前に、何の

経が読まれたのかは不明である。平安時代に入り仁明天皇や文徳天皇の中陰供養の際には、亡くなった場所や山陵近くの寺で中陰供養が行われるようになる(以上『日本紀略』)。

院政期では(『中右記』『永昌記』『長秋記』『兵範記』等)、中陰供養の他に、月忌や遠忌と呼ばれる周忌供養も行われている。中陰供養は法事と呼ばれ、三七日・五七日・七七日の重要視化が見られる。法事が行われる場所は、亡くなった邸が多く、殯殿と呼ばれる火葬後の骨を安置した寺や火葬場(墓・山陵、近くの寺でも行われる。仏は、釈迦や阿弥陀如来、普賢菩薩のほか、亡くなる直前の逆修で用いた仏像や、曼荼羅が見られ、ある程度の傾向はあるが一定化されていない。法事とは別に、中陰期間中毎日の懺法と例時、七日ごとの御齋会を命じる京近隣七ヶ寺への誦経使派遣が行われている。奈良時代では諸寺に誦経をさせる齋が中陰供養だったが、院政期では法事が主になっている。

二 平安時代の逆修の変遷

逆修は、貞観五年(八六三)の周忌願文に見える例が早く、内容が分かるのは、元慶七年(八八三)三月十八日に式部大輔室が行った多宝仏塔の造立と写経を供養する願文である。³「廻為周忌之追福」や「唯願將充自三七日、至三三七々七日之大功德」から中陰供養との関係性は見いだせるが、

方法が異なる。また、文中に鉄冨山の言葉は見えるが、須弥山や弥勒菩薩は出てこない。逆修が仏菩薩との結縁を願うものならば、なぜこれらの名が願文に出ないのだろうか。

次の例は、延喜九年(九〇九)三月九日に仁和寺で宇多上皇が行った法華八講である(『日本紀略』)。撰闋期以降、周忌・遠忌頃に八講が行われるが、中陰供養での例を見ない。藤原忠平が行った承平二年(九三二)三月廿日の七ヶ度の逆修では、一日誦経を延暦寺など七寺同時に行わせている。⁴中陰供養の際に見られる誦経使派遣と同様である。

天元五年(九八二)七月十三日、齋然上人が母の逆修として、七七日のために十講を行っていた。⁵供養に用意されたのは八卷の『法華経』と二卷の『仁王般若経』、十齋仏菩薩等の絵像のため、この十講は法華十講ではない。十齋仏菩薩は後述する「十王経」の前身となる生七齋との関連を起想させる。

治安三年(一〇二三)五月廿八日から四十九日間、藤原道長は法成寺に等身阿弥陀如来絵像四十九体をかけて逆修法事を行った(『小右記』)。還暦を迎えた万寿三年(一〇二六)四月三日には、年齢数の六十一体と、一月に十二巻を宛てて書写した阿弥陀経を供養し、二度目の逆修を行っている(『左経記』)。以後、逆修を複数回行う例が増える。

撰闋期、逆修済みを理由に、遺族が行う中陰供養を故人が制止した例がある。⁶この頃には七分全得の考え方があったよ

うである。しかし遺族の思いは異なっていたようで、中陰供養とは異なる曼荼羅供養や阿弥陀護摩を検討している例が見られる（『春記』長暦三年（一〇三九）十月廿五日）。

康平四年（一〇六一）閏八月十日の藤原尊子の五十日逆修願文では両親への廻向の言葉が見られ、これは院政期の逆修に増える。願文に「弥陀」は見られるが、造立されたのは釈迦如来像と、十大弟子の仏画・極楽曼荼羅である。この願文で、「没後之追福、七分獲一」という言葉がようやく見られ、同じ大江匡房作の「右大弁長忠為母儀逆修善願文」には七部全得の言葉がある。しかし、先述の式部大輔室逆修願文の「乃至法界平等利益」という言葉により、逆修は他者への廻向を元来含んでおり、七分全得の考え方は日本では後付け観がある。匡房作の藤原敦基逆修では、初日釈迦三尊、一七日不動明王、二七日葉師如来、三七日観世音菩薩、四七日弥勒菩薩、五七日法華曼荼羅、六七日地藏菩薩、七七日極楽浄土曼荼羅が供養された。朝の法花懺法、夕の阿弥陀経については、院政期中陰期間中にも行われている。「極楽得二必往生」とあるが、初日から七七日にあたる日それぞれの仏菩薩は同じではなく、阿弥陀如来がない。一方、承暦元年（二〇七七）七月廿三日から始まる藤原頼通室隆姫女王の五十日逆修で見られる仏は阿弥陀如来のみである（『水左記』）。

当初の逆修は、仏との縁を望む・往生を望むというより、功德を積むことに重点が置かれているため、逆修の方法は中陰供養を意識する等の固定化がされていないと考えられる。十世紀に中陰・周忌供養の法事と共通する方法に変化し始める。弥勒信仰から阿弥陀信仰の極楽・地獄という、死後（冥途）・転生後（六道）の世界観の変化に伴うものと考ええる。さらに、院政期にかけて逆修方法の二極化が見られる。ひとは、供養対象が阿弥陀仏のみで、つまり阿弥陀仏との仏縁を望むもの。もう一つは、供養する仏菩薩が供養日ごとに変わるものである。後者では、釈迦如来・地藏菩薩はほぼ外されず、日本における初期逆修の系譜を引くものと考ええる。

三 「十王経」と逆修

日本の逆修では当初から七七日が意識されており、逆修の開始に三七日の逆修を述べる「灌頂経」の影響は考えにくい。また、平安時代に関わる「十王経」は、延久四年（一〇七二）に日本伝来とされる唐中後期成立の「閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経」の系統で、日本における逆修の開始に影響はない。しかし、「十王経」は生七斎を基礎に、七七斎が挿入されてきたものという。平安時代における逆修の開始は、この大陸の生七斎からの流れに位置づけられると考えるが、紙幅の関係により別稿で検討したい。

おわりに

一章で中陰供養の変遷を確認し、第二章でそれと比較しながら撰関期以前に重点を置いて平安時代の逆修の変遷を考察してきた。逆修は、菩提供養が意識されながらも中陰供養とは異なる方法で行われていたが、死後・転生後の世界観の変化に伴い、中陰供養と類似する方法が見られるようになった。日本の逆修は、当初は功德を積むことに重点が置かれ、特定の浄土への希求、つまり仏縁を結ぶ願いは希薄だった。このことが、平安時代において仏縁を望む結縁経が逆修供養の際に行われなかった原因である。

- 1 川勝政太郎「逆修信仰の史的研究」(『大手前女子大学論集』第六号、一九七二。発表時、川島一通「法然所修『逆修法会』の特異性」(『三康文化研究所年報』第三三三号、二〇〇二)に平安時代の逆修研究があると安孫子稔章氏より情報を頂いた。後日、確認する予定である)。
- 2 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典、第二版』第四巻、小学館、二〇〇一、二九〇頁。
- 3 『菅家文章』巻第十一「為源大夫閣下、先妣伴氏周忌法会願文」、巻第十二「為式部大輔藤原朝臣室家命婦逆修功德願文」(川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』日本古典文学大系七二、

岩波書店、一九六六)。

- 4 東京大学史料編纂所編『眞信公記』大日本古記録、岩波書店、一九八四。

- 5 『本朝文粹』巻第十三「齋然上人入唐時為母修善願文」(大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注、新日本古典文学大系二七、岩波書店、一九九二)。

- 6 『勸修寺旧記』承平二年九月廿三日(塙保己一編『続群書類従』七八〇(補・太田藤四郎、第二十七輯上、続群書類従完成会、一九八四)、『小右記』寛仁二年四月廿七日・寛仁三年九月十九日)。

- 7 『江都督納言願文集』巻第五「土御門左大臣室家尊子五十日逆修願文」、巻第三「右大弁長忠為母儀逆修修善願文」、巻第六「前上野守藤原敦基朝臣逆修願文」(山崎誠『江都督納言願文集』注解『塙書房、二〇一〇)。

- 8 本井牧子「十王経とその享受(上)」(『国語国文』七六六号、中央図書出版社、一九九八)。

- 9 小南一郎「十王経」の形成と隋唐の民衆信仰」(『東方学報』七四、京都大学人文科学研究所、二〇〇二)。

〈二次史料〉

黒板勝美『新訂増補国史大系』吉川弘文館、一九六五

増補史料大成刊行会『増補史料大成』臨川書店、一九六五

(キーワード) 逆修供養、中陰供養、結縁経、十王経、古代

(佛敎大学大学院)